

## 要約

本研究は、震災復興へのスポーツの影響を明らかにするための基礎研究として位置づけ、新聞のスポーツ記事分析を中心として、震災後のスポーツ記事の傾向を明らかにしたものである。そして、本研究において明らかとなる震災復興を目的としたスポーツ活動の傾向から、従来の復興支援として行われているスポーツ活動の有効性を仮説的に提唱し、検討を加えた。以上を研究の目的とし、『讀賣新聞』、『毎日新聞』、『朝日新聞』のスポーツ記事分析の結果、以下のことが明らかとなった。

新聞では、震災復興を目的としたスポーツ活動に関する記事が盛んに報道された。この事実は、『震災とスポーツ』ということに大きな関心もたれていたと考えて良いであろう。また、記事分析を通して、様々な場面で使われる『スポーツの力』は、ただの感動物語や美談としてのみに使われている言葉ではなく、それは現実的な『力』としてスポーツ活動が機能していることを表していることが明らかとなった。このことは、従来行われてきたような復興支援政策としてのスポーツ活動の有効性を示唆していると言ってよいだろう。

## キーワード

東日本大震災、スポーツ、スポーツの力、スポーツ競技会、オリンピック招致、  
復興支援政策、障害者スポーツ、体力維持、イベント

## 『東日本大震災について考える - 震災とスポーツ - 』

ライフマネジメント学科 3 年 渡辺優実

### 1、序論

国難ともいえる未曾有の災害に見舞われた東日本大震災と、原発放射能事故。五ヵ月以上も時間が経過した現在も多数の人々が避難生活をおくり、被災地の復旧・復興、被災者の生活基盤の回復など、懸命の努力がすすめられている。同時に様々な分野で被災者、避難者と連帯した復興活動が取り組まれている。この間、スポーツ分野では一時的に活動の停止が余儀なくされたが、その後旺盛な活動が再開され、社会的にも注目されている。以上のような影響は、実際に陸上競技にたずさわっている私にも及んできた。震災直後は余震が後を絶たず、満足に練習も出来る状況になかった。しかしながら、被災地にいるにも関わらず、夏のシーズンに大活躍するアスリート達を新聞やテレビで目の当たりにする。そのアスリート達の努力は、スポーツ活動の震災に対する影響を可視的にみる一つの視点となりうるだろう。本研究の動機は、このような現在の課題を視野に入れ、それらの課題を学問的に対象化しようとするところにある。

本研究は、震災復興へのスポーツの影響を明らかにするための基礎研究として位置づけられる。そこで、本研究では新聞のスポーツ記事分析を中心として、震災後のスポーツ記事の傾向を明らかにしてみたい。そして、本研究において明らかとなる震災復興を目的としたスポーツ活動の傾向から、従来の復興支援として行われているスポーツ活動の有効性を仮説的に提唱し、検討を加えることとする。

こうした震災復興を目的としたスポーツ活動を学問的に検証することは、様々な場面で言及される『スポーツの力』を可視的に捉えることができ、上記の現在の課題を解明するため重要な視点となると考えられる。震災とスポーツを研究の対象とする本研究の意義はこの点にある。

先行研究には以下のような研究が挙げられる。

・上柿和生、「東日本大震災に日本のスポーツ界はどう動いたか」、『現代スポーツ評論』、24号、2011年、154～161頁。

・鳥井健次、「被災者にの心に届けたい、スポーツの力(東日本大震災)」、『議会と自治体』、160号、2011年、30～35頁。

上柿は、3月11日の大震災の影響で試合や大会が相次いで中止となった事実に触れ、

また競技組織による迅速な対応について記述している。また、ウィンタースポーツを専門とする選手や世界選手権を目前に控えた陸上競技選手に焦点を絞り、スポーツ活動を通して被災者に大きな力を与え、アスリート達が立ち上がることによって集めた義援金は復興への原動力となると示している。

また鳥井は被災者に対して勇気や生きる活力を与えることにスポーツの役割を見出し、そのためには、スポーツが安心して行える環境作りとスポーツ界の社会連帯が重要であることを記述している。

さらに東日本大震災のみならず、阪神大震災や新潟中越地震など、復興支援とスポーツ活動について述べた研究も数多く存在する。そこでは、震災後にスポーツ界において支援という行動がいち早く広がり、被災者達がアスリートと体を動かすことによって、精神面も含めた体調が改善されていくということに触れ、スポーツの役割が重要視されていることが指摘されている。これらの研究は、震災復興とスポーツに焦点を当てた優れた研究であるが、各出来事の言及というレベルに留まっており、『スポーツの力』を本質的に明らかにした研究としては不十分である。

以上の検討から、従来の研究では震災とスポーツに関して十分な考察が行われていないということが明らかとなった。よって本研究では、新聞の記事分析から『スポーツの力』を浮き彫りにすることを課題とする。

上記の課題を解決するために本研究では、主たる資料として『讀賣新聞』、『毎日新聞』、『朝日新聞』を用いる。これらの新聞は、性質上主観的な論調を採用する場合があります、また編集者の編集方針によって新聞記事の内容が左右されてしまうという危険性も考えられる。しかしながら、新聞は、当時の具体的なスポーツ活動の様子が描かれている、ほとんど唯一のまとまった資料であるということに加えて、スポーツ活動が震災復興にどのような影響を及ぼしたかを考察する土台となる貴重な資料となりうる。以上のようなことから、本論では新聞においてどのようなことに関心がもたれたのか、また報道のされ方に着目してみたい。

## 2、本論

### (1) スポーツ界の状況

ここでは、新聞記事に記載された震災後のスポーツ界の状況をまとめてみたい。

大震災の影響は、予定されていたスポーツ競技会・スポーツに関わるイベント・催し

物を中止・中断、延期に追い込んだ。震災当日、Jリーグは余震や交通機関の混乱が予想されるとして、12日、13日に開催予定であったJ1、J2の計19試合を中止すると発表した。続いて日本中央競馬会は12日、13日に開催を予定していた中山競馬、阪神競馬、小倉競馬の開催中止を発表した。公営競技は競輪が全ての開催を中止し、地方競馬は帯広と高知、オートレースは飯塚と川口、ボートレースは平和島が中止とされた。これらはいずれも投票券の購入・払戻金などに混乱が予想されるギャンブル競技であることから、リスク回避に向けた動きであることが要因として考えられよう。バレーボールも反応が早かった。Vリーグは12日、13日に各地で行われる予定であったプレミアリーグ、チャレンジリーグの全試合が中止となった。この他、バスケットボール女子Wリーグのプレーオフ決勝と日本バスケットボールリーグは、11日～13日に行われる予定であった計5試合を延期した。さらにbjリーグも12日、13日に開催予定であった全14試合を中止とした。終盤にさしかかったウィンタースポーツも、アイスホッケー・アジアリーグのプレーオフ決勝第1～3戦が中止となった。また12日、13日に札幌市で行われる予定であったフリースタイルスキー全日本選手権モーグル、19日に予定されていたノルディックスキージャンプの今季国内最終戦も中止に追い込まれた。スケート全日本都道府県対抗ショートトラック競技が長野県で開催予定であったがこれも中止された。石巻市において12、13日両日予定されていた全日本ライフル選手権は試合会場の天井が落ちたことで中止となり、アマチュアボクシング全日本女子選手権も同様の理由から取りやめとなった。日本陸上競技連盟主催大会では、愛知県で開催される予定であった名古屋国際女子マラソンが中止となり、イベント自粛を余儀なくされプロ野球オープン戦は5試合が中止となった。以上のようなスポーツ活動の中止の状況が新聞報道に見られた。(新聞に掲載された中止記事を表にまとめた。表1参照)

しかしながら、このようなスポーツ活動の自粛や中止が相次ぐ中で、スポーツ活動を通して被災者に向けた復興支援に繋げようという動きが出始めた。例えば、日本高校野球連盟は世間の視線を意識しながらも、予定通り23日から12日間にわたって甲子園球場での春の選抜大会を開催した。開催理由について日本高野連の奥島会長は被災地にある学校の出場の意欲が強いことを挙げ、「一生に一度かもしれない選手たちの機会をなくしたくない。高校球児の真剣なプレーが被災地の方々のみならず、全国の人々に対し一筋の光となるのではないか」<sup>1</sup>と開催理由を説明した。選手宣誓においても「最後まで諦めず、全力プレーという野球の種を東日本へ届け、復興という芽の力強い成長を願

う。」<sup>2</sup>と被災者に対する激励の言葉が送られた。

## (2) スポーツの力

以上の新聞記事に見られるような、『スポーツの力』を生かして復興に繋げようという報道が6月の新聞記事を中心に増加した。以下では、そのような記事を抜き出し、検討を試みたい。

まず、オリンピック招致委員会が再びオリンピック招致活動を始めたいと東京都へ要望書を提出した。その新聞記事では「スポーツ、五輪が被災地の復興に役立つのであれば」<sup>3</sup>と記述され、被災地の復興に招致活動を大きく貢献するであろう旨が記されていた。現在でも放射能汚染問題がしきりに報道されているが、日本の安全と信頼を取り戻すために五輪招致は最適なPRの場なのである。このことに関して、日本オリンピック委員会竹田会長は「東日本大震災の復興のシンボルとして、今こそスポーツが力となりたい。招致を目指して国民が一体となることは、国益に資すると信じている」<sup>4</sup>と意義を強調し、石原知事に要望書を手渡した。石原知事もそれに対し「勝つことで『やるなあ』という共感がエネルギーになって、国民がまとまってくるものだ」<sup>5</sup>とした。そして、竹田会長は、「23日東日本大震災の復興支援策として、被災地に選手らを派遣してスポーツ大会などで住民と交流する『ミニ五輪』を計画している。」<sup>6</sup>ことを明らかにした。このように、『スポーツの力』とは見えないただの感動物語や美談ではなく、現実的にスポーツを通して海外からの信頼を取り戻したり、住民たちの精神面を含めた健康を取り戻す施策としてイベント企画が展開されていることが読み取れる。

またこのような記事も見られる。「東日本大震災の復興支援を目的に仙台市のKスタ宮城で行われるプロ野球の『マツダオールスターゲーム 2011』第三戦で、主催者の日本野球機構が被災者やボランティアなど3000人以上を招待する方向で検討していることが7日に分かった。」<sup>7</sup>以上の記事から読み取れるように、被災者やボランティアなど3000人を招待することは、被災地にいる人々に少しでも力を与えようという試みである。つまりは、無料で多くの人々を招待し、スポーツを見ることで力を与えられるという目論見のもと企画されたイベントであるということである。

競技者の視点に立った報道では、次のような報道がある。

「東日本大震災で福島県南相馬市の実家が被災した今井正人(トヨタ自動車九州)は男子1万メートルで16位だった。『結果はどうであれ、諦めないところを見せたかった』。歯を食いしばって後半に順位を上げ、駆けつけた家族や知人に気迫のこもった走りを見

せた。順大時代に箱根駅伝の5区で活躍し、『山の神』と呼ばれた27歳。福島第一原発から半径20キロの警戒区域にある実家は、2階部分と柱を残して津波に流された。亡くなった友人もいて、この日はシューズに喪章をつけて、出場した。3月10日が祖母の命日で、震災前日まで帰省していた。『おばあちゃんが帰れと言ってくれたのかな。』そう振り返ると、涙があふれた。『僕には走る使命がある。それは重荷ではなく、僕の花になる。』マラソンでロンドン五輪に出場という夢を、南相馬の人々と共に追いかける。<sup>8</sup>以上のようなものであった。ここではさらに、「福島出身『走る使命ある』」<sup>9</sup>とし、自らの家族が被災することによって、本人が力をもらった旨を強調して報道した。現実には選手本人が被災したにも関わらず、結果を出した選手もいる。大阪陸上選手権大会に出場した女子400メートル障害の久保倉里美(新潟アルビレックス)は55秒34の日本新記録を樹立している。震災後3カ月と経っていない状況下で、従来の日本記録である55秒46を0秒12更新したものであった。<sup>10</sup>久保倉は福島大学出身で、震災当時も現在もその拠点を福島県に置いている。久保倉をはじめ、ナチュラル(現東邦銀行)の選手は、活動実業団の移行を余儀なくされ、練習場所が確保できず、さらに食事も避難所にいたことからままならなかった。しかしながら、久保倉を筆頭に、東邦銀行の選手は、夏のシーズンにおいて自己新記録を連発し、8月に行われた世界陸上選手権大会に数多くの選手が出場し、活躍する姿を見せた。このような事実は、上記の今井選手と同様、被災したことによって自らの力に何らかの力が加わったことに他ならない。

その他復興支援政策として、野球では読売巨人軍が「21日、福島県郡山市の開成山球場で行われる巨人 ヤクルト2連戦(28日、29日)を『結束×がんばっぺ!福島シリーズ』と銘打ち、東日本大震災復興支援を行う」<sup>11</sup>と発表した。そこでは、巨人軍原監督が「福島の皆さんに少しでも喜びをお届けできるよう頑張ります」<sup>12</sup>とするなど、被災者に向けて『スポーツの力』を届ける旨が強調された。さらには障害者スポーツにおいても同様の動きが見られた。「多くの方が厳しい生活を送る被災地で、『スポーツをしたい』とは、まだ言い出しにくい。特に絶対数が少ない障害者アスリートの声は埋もれがちになる。しかし、体を動かさないことは切実な問題だ。『私たちにとってスポーツは体力を維持し、気持ちを前向きにし、社会とつながるための手段。復興に向けて必要なんです。』」<sup>13</sup>以上のような記事が見られた。例えば、車いすを使う障害者は、車いすを失うと体力がすぐに落ちてしまう傾向が見られる。仮に車いすがあったとしても、避難所生活を強いられれば活動範囲が狭まり、体力の下降は健常者の数倍であるとも指

摘される。つまり上記の新聞記事に見られるように、障害者にとっての『スポーツの力』とは切実な体力維持の問題を解決する力であったのである。

#### 4. 結論

『讀賣新聞』、『毎日新聞』、『朝日新聞』のスポーツ記事分析として、震災とスポーツに関する内容は、以下のようにまとめられる。

新聞では、震災復興を目的としたスポーツ活動に関する記事が盛んに報道された。この事実は、『震災とスポーツ』ということに大きな関心もたれていたと考えて良いであろう。また、記事分析を通して、様々な場面で使われる『スポーツの力』は、ただの感動物語や美談としてのみ使われている言葉ではなく、それは現実的な『力』としてスポーツ活動が機能していることを表していることが明らかとなった。このことは、従来行われてきたような復興支援政策としてのスポーツ活動の有効性を示唆していると言っただろう。

3月11日に突然起こった大震災、当時直接的被災とはならなかった私達も混乱し現在においてもその影響は各所に見られる。このような状況下で、『スポーツの力』は人々を動かす大きな力になっていることが分かる。この震災をきっかけに人々は『スポーツの力』でこれほどまでに元気、そしてやる気になるということ暗黙のうちに理解し、そしてスポーツ活動にも見られるどんな状況でもあきらめない強い心が復興の原動力にも寄与している。震災後は私自身、練習に身が入らない日々が続いた。しかし一競技者として被災地の競技者らを見て多大な力をもらった。なぜならば、練習することも大変な状態にも関わらず、自己記録更新やチームとして白星をあげる状況を目の当たりにしたからである。そのような状況を見て、私も負けていけない。そう強く感じた。ともすれば私自身が何よりも『スポーツの力』をもらっていたのかもしれない。そう深く理解した。

以上のように、新聞を通して震災とスポーツに関して分析してきた。新聞を資料として使用することで震災復興を目的としていかにしてスポーツ活動が行われたのかに関して分析することができた。しかし、資料的限界から、スポーツ活動を通して『スポーツの力』が効果として表れたのか否かについては詳細に検討することができなかった。この問題に関しては、様々な事例(成功例と失敗例)をあたり本研究と照らし合わせながら検討することで解決することができよう。それは今後の課題としたい。



- 
- 1 「高校野球開幕」、『朝日新聞』、2011年3月23日、15面。
  - 2 「選手宣誓『全力プレーを東日本へ届ける』」、『朝日新聞』、2011年6月19日、25面。
  - 3 「東京五輪招致 歓迎の声」、『読賣新聞』、2011年6月18日、25面。
  - 4 「『東京五輪 立候補を』選手ら要請」、『読賣新聞』、2011年6月24日、25面。
  - 5 同上。
  - 6 同上。
  - 7 「球宴 Kスタ3000人招待へ」、『読賣新聞』、2011年6月8日、17面。
  - 8 「元祖・山の神 今井16位」、『読賣新聞』、2011年6月11日、25面。
  - 9 同上。
  - 10 「久保倉が55秒34の日本新」、『読賣新聞』、2011年6月27日、27面。
  - 11 「G福島2連戦で復興イベント」、『読賣新聞』、2011年6月22日、25面。
  - 12 同上。
  - 13 「復興へ 動き始めた障害者選手」、『朝日新聞』、2011年6月19日、25面。

表1 新聞に見るスポーツ活動の中止報道

競技	震災によるイベントの変更、中止等
スキー	フリースタイルスキー全日本選手権モーグル中止
ノルディックスキー	伊藤杯大倉山ナイタージャンプ大会中止 世界ジュニア選手派遣取りやめ
スケート	全日本都道府県対抗ショートトラック競技会中止
アイスホッケー	アイスホッケー・アジアリーグプレーオフ決勝第1～5戦中止 世界選手権選手派遣中止
日本体操	全国高校選抜大会、新体操・体操中止 10月体操世界選手権再検討
トランポリン	ブルガリア大会派遣取りやめ
レスリング	4月以降国内大会全て実施 全日本選抜選手権他支援チャリティー大会として実施
フェンシング	高円宮碑フェンシングW杯・男子フルレGP中止
女子ゴルフ	Tポイントレディスゴルフトーナメント中止
女子ゴルフツアー	ヨコハマタイヤ・プロギア・レディース中止 ヤマハレディースオープン葛城中止
高校体育	全国高校選抜大会、レスリング、相撲、フェンシング、 アマチュアボクシング、ライフル射撃、ボート、自転車、 ホッケー、空手、アーチェリー、なぎなた中止
大学野球	4月中のナイター自粛に伴うプロ野球のデーゲーム開催への協力
東京六大学野球	東京六大学・社会人対抗戦中止
テニス	女子国別対抗戦、フェド杯ワールドグループ2部入れ替え戦延期
国際スケート	フィギュアスケート世界選手権日本開催断念 フィギュア国別対抗戦1年後に日本で開催
サッカー	アジア・チャンピオンリーグ2試合延期 日本代表親善試合中止 キリンチャレンジカップ2試合中止 長居スタジアム チャリティーマッチ開催
関東大学サッカー Jリーグ	関東大学リーグ前期開幕延期 J1、J2の計19試合中止 3月中公式戦全て中止、延期
モーターサイクル 陸上	オートバイ世界選手権シリーズ第3戦、日本グランプリ延期 名古屋国際女子マラソン中止 世界選手権マラソン代表発表延期 まつえレディースハーフマラソン中止 全日本実業団ハーフマラソン中止 長野マラソン大会中止
水泳	日本選手権中止
バスケットボール	Wリーグのプレーオフ決勝、JX - トヨタ自動車戦中止 プレーオフ・ファイナル第2、3戦中止 Wリーグのプレーオフ決勝第4、5戦中止 3月11日～13日までの5試合延期 今季残り試合プレーオフの中止 計14試合中止 仙台vs浜松試合中止 仙台、埼玉、東京の3チームが今季残り試合を中止、活動を休止 秋田、新潟の一部試合中止
バレーボール	プレミアリーグ、チャレンジリーグ全試合中止 日韓Vリーグ・トップマッチ中止
ビーチバレー	JBVツアー2011予選会沖縄カップ中止
ハンドボール	プレーオフの開催中止
日本ラグビー	7人制大会、YC&ACジャパンセブンズ中止 三地域対抗の関東代表対関西代表中止 東京セブンズ中止 全国高校女子選抜大会中止
関東ラグビー	全早慶明対抗戦中止 ニュージーランド学生代表対関東代表の親善試合中止
卓球	アジア・カップ中止

「読売新聞」、「毎日新聞」、「朝日新聞」より作成。